

会員の声 1945 年生まれから見た“戦争と平和”(その1)

金沢支部 平口 哲夫

毎年開催される 8 月 6 日の広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式、8 月 9 日の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典、8 月 15 日の全国戦没者追悼式などに関連して「戦後何年」という言葉がよく使われる。その何年というのが私の年齢なので、特別の思いがする。1945 年(昭和 20 年)7 月 26 日にイギリス首相、アメリカ合衆国大統領、中華民国主席の名において日本に対して発せられたポッドダム宣言(日本への降伏要求の最終宣言)を日本政府が受諾したのが 8 月 14 日、国民に玉音放送で発表したのが 8 月 15 日であることから、毎年 8 月 15 日に政府主催の全国戦没者追悼式が行われるようになった。しかし、降伏文書に調印したのは 9 月 2 日、東京湾内に停泊する米戦艦ミズーリの甲板においてであり、これをもって第二次世界大戦は正式に終結した(日独伊の三国同盟のうち、イタリアは 5 月 4 日に、ドイツは 5 月 8 日に降伏文書の調印を終えている)。

さて、私が世界連邦運動協会に入会したのは、2001 年 9 月 11 日に起きたアメリカ同時多発テロ事件以降、アメリカによるアフガニスタン攻撃、さらにはイラク戦争に至る経緯をみていて、「いまのよ



敦賀空襲を伝える会編集・発行 『敦賀空襲・戦災誌』(1985)カバーの一部を転載

うな国連ではだめ、世界連邦を設立しないと」思ったことが直接の動機となっている。しかし、そもそも“戦争と平和”についての関心は、私の生い立ちに由来する。1945 年 4 月 4 日に福井県敦賀市の母方実家で生まれ、その 100 日後に B29 爆撃編隊の空襲により実家は焼失、危ういところで助かった“体験”がある。母、祖母、兄、姉と私は、一時、福井県丸岡町の父方実家に身を寄せたが、祖母はそこで病死。当時、父は石川県金沢市に単身赴任していたので、その年のうちに私たちも金沢で住むことになった。食料難の時期、母乳の出が悪く、母は乳飲み子の私にオモユを薄めたものとか、ニンジンの汁を飲ませたそうで、

そのせいか、私は胃腸が弱く、痩せっぽちになってしまった。

『文芸春秋』2005 年 2 月号に「われら敗戦の年生まれ」と題して、車谷長吉(作家)・櫻井よしこ(ジャーナリスト)・谷垣禎一(財務大臣)3 氏による鼎談が掲載され、「1945 年生まれの著名人」として 111 名のリストが付されている。これらの方々がどういう状況で生まれ、育てられたのかということに関心をもって、この鼎談を読み、その後も関連情報に目を向けてきた。鼎談で谷垣氏と櫻井氏は以下のように語っている。

）谷垣 私は 3 月 7 日東京生まれです。父は農林省の役人をしていて、代々木八幡の借家に住んでいました。生まれた三日後の 3 月 10 日が下町を中心にした東京大空襲、そして 5 月 25 日が山の手への空襲でした。母の話では、父はその日は出張で家におらず、見ているうちにどんどん火が迫ってきて、母は腹掛けの“どんぶり”の中に 2 ヶ月の私を入れて、今の NHK センターの辺りにあった代々木の練兵場まで逃げて、タコ壺(一人用の塹壕)の中に隠れていた。そのうちに家が全部焼けてしまったそうです。

）櫻井 私はベトナムのハノイで生まれました。父が貿易の仕事をしていた関係でベトナムにいたんです。日本が降伏した後の 10 月 26 日生まれです。降伏後、引揚のために、ハノイから百キロ離れた港町ハイフォンに集合するように指示されていたのですが、母が身重なため両親はハノイに残りま

した。母は野戦病院で産婆さんの役をしてくれた軍医さんに介助されながら、私を生んでくれました。

）櫻井 母のお腹にいるとき危うく死ぬかもしれないことがあったんです。戦争末期、両親はハノイの3階建のビルに住んでいたのですが、戦況が悪くなってきたとき、連合軍が踏み込んできたら、民間人といえども虜囚の辱めを受けてはいけなから、中庭の池めがけて飛び降りて死のうと言いつつ待っていたそうです。で、ある時銃声が聞こえて、兵士の叫び声でした。両親は3階に駆け上がりもしフランス軍が扉を蹴破って来たら自殺しようと身構えていたそうです。すると父が「待て、日本語だ」と。もしあの時外国の軍隊が来ていたら、両親は飛び降りて、私は生まれなかったかもしれない。

私の母校である金沢市立十一屋小学校『文集六年 卒業記念号』(1958)に寄せられた、親たちの感想には終戦前後の苦労が偲ばれる。

「思えば終戦時に出生し続いて引揚げと、本当に今あの当時のようすを考えると、肌粟を生ずる思いで一杯です。よくも幼いながらも命があったものと、すこやかに成長してくれたわが子を見るたびに、感無量のものがあります」

「この間の事情をおはなしすれば、長い時間と現実生きる道の如何にきびしいものであるかを、信じられない事実を悟らねばなりません」

「妻のおなかに我子を抱いたまま、今日も明日も名古屋の大空襲の真最中に、何度死を覚悟したかわからなかった」

「妻の身より生まれてまもなく、背中におんぶされ空襲に逃げまどうあの悲惨なありさま、倒壊された建物の下より掘出された死体の数々、目をおおう無惨な姿、妻の背中に泣き声をあげて乳を求める長男の姿が目につかぶ」

「誰もいない仏間で、お父さん見て下さいとひとり申して、必ず良い子になります、ご安心下さいと報告いたしました」

「無気味な空襲のサイレン下に、日本を遠くはなれた満州の地に末っ子として産声をあげ、疎開につぐ内地帰国と、生まれ早々にしてあわただしい運命に支配されたこの子」

「空を征く日の丸の飛行機が次第に数少なくなるにつれて、米軍機の来襲が加速度的に多くなり、戦局の重大さがひしひしと感ぜられ、祝いを述べてくれる戦友ともども、わが子の顔は現世では見られぬだろうと語りあったものでした」

「南満州の片すみにてソ連軍や中共軍の圧迫にたえしのび、どうしても元気な男の子を生みたいと、自分自身をむち打ちながら不安な日々を送りつづけていたその夜、生憎と父さんはソ連の接収した工場の夜警に廻され、三つの姉さんと二人きりで雪深い寂しい晩、母さんはあなたを生んだのです」

「食糧の不十分な当時は全く父の出が都まってしまった。朝夕の牛乳は、半分は水でうすめられて、幾月たっても生れてまもない顔をしていた」

「昭和28年7月ようやく日本に帰ることができたよこびよりも、全然日本語のはなせない3人の子供たちをみると、入学後はどうなるだろうと、その不安でとても苦しかった」

「乳児のときは思うように哺乳もできず、またミルクも配給で思うように入手できず、親子共々泣きあかした」「台湾の中部よりやや南、義嘉、その一つ先の水上というところが○ちゃんの生まれた土地なのです。母さんは大きな腹をかかえて、空襲をさけるため夜の山道を3時間半ばかり、荷物をつんだ牛車の後を、それも先発の父のあとを追って、関子領という温泉のふもとまで、とぼとぼと歩いていきました」「無気味な空襲警報のサイレンの音。素掘りの防空壕の土が時々ざらざらとくずれる。私は柳行李を守ってじっと息をつめている。行李の中で○子が無心にすやすやとねむっている」

「8月の炎天下、満州奉天の駅前には、走りくるトラックとそかいの人たちで雑踏をきわめ、馬糞くさい埃がたちこめている。どことも知れず妻と子をそかいさせねばならぬ。もう生きてはあえぬだろう」

(つづく)